二〇六〇年、父になる。

函館市立本通中学校　秋田麗王　２年

二〇六〇年、今から三十六年後。僕は父と同じ五十歳になる。僕もその頃は、中学生の父親になっているだろうか。

父は、僕が生まれてすぐの頃から、道外で単身赴任をしているので、長期の休暇でしか会うことができない。そのため、父の帰省は僕の一番の楽しみであり、我が家の一大イベントでもある。

空港に迎えに行くと、僕は大勢の人混みをかき分けて、到着出口の前の最前列を陣取って父を待ち構える。出口の扉から出てきた父の元へ、ダッシュで駆け寄って抱きつく。これが『帰省の定番』だった。その感動的な再会シーンが、よっぽど目立っていたのか、新聞記者から取材を受け、大きく掲載されたこともあった。

あれから…五年。中学生になった今も、母と一緒に空港に父を迎えに行く。しかし、到着出口の最前列で待ち構えることも、抱きつくことも、さすがに無い。今は、人集りの後ろの方に立ち、照れ臭さを誤魔化すために、スマホを弄りながら出迎えるスタイルが、すっかり『定番化』している。

「学校は楽しいか？」「今は何が流行っている？」「何か欲しいものはあるか？」…。僕の身長も声もこんなに変わったのに、父は以前と変わらず、会いたかった気持ちを爆発させるかのように、質問が止まらなくなる。数年前までは、僕も父と同じ熱量で質問に答えていたが、最近では「いや…べつに…。」と素っ気ない返事をすることが増えた。もちろん、父の帰省は今も変わらず嬉しいが、感情を表に出すのが照れ臭いのだ。

僕の成長を誰よりも喜んでくれて、いつも全力で応援してくれる父。熱量の高さで愛情を表現してくる不器用な父。実は、僕が想像するより何倍も、さみしい思いや辛いこともあると思うが、一切弱音を吐かずに、僕のためや家族のために頑張っている父を、尊敬しているし、感謝している。

僕は今のところ、まだ将来の夢は決まっていない。ただ一つだけ決めていることは、父のような家族想いの愛情深い人間になろうと思っている。

二〇六〇年、五十歳。
僕も父のような父親になっているだろう。